

二十八 回想事始め

—— 課植園「荒地」園丁の課業

書棚の片隅に『一生の読書計画』という書物がある。裏表紙の裏に一九六三年五月四日という日付が書いてある。どうも、大学に入学してまもなく買ったようだ。いなか出のまだ少年がまわりを見て自分の視野の狭さに気づいたせいだろう。あるいはそれだけ意気込んでいたということか。著者の名はクリフトン・ファディマン。インターネットで調べてみたら、英語の Wikipedia に経歴が出ていた。アメリカのジャーナリストでテクニカルな著作家で、二十世紀の高度経済成長期の人々に読書案内として書いたようだ。紹介されている作品の著者は八十八人。こういう話をするといかにも読書人に聞こえるけれども、十八歳のとき自覚したように、本来的に多読ではない。五十年以上も経った今、推薦書のなかでわずかにかじった書物を含めても七割に達しない。人が一生のうちにぜひ読むべきだとされた書物のうち、まだ手にしていない本がたくさんあるのである。残り少なくなった年数で読めるかしら？。その上、ほかの人はまた別の多くの書物を勧めるのである。

けれどもそれほど関心のない書物を読む気にはならないから、最近、読書案内書で推薦された書物から興味を引くものを選び出しにくくなってきた。書評に載る書物も、夏目漱

石の言う世の推移のせいで、つまり現今の著作者との意識のギャップが広がってきたせいで、関心と呼び起こすものが少なくなってきた。もっともそれは、たんに老齢による衰弱が原因なのかもしれない。いなかに戻ってきた頃から、これから読める書物の数は限られているのだから、なにか工夫しなければならぬと考えるようになっていた。先日、猫ならぬPETが、脳で養っている髄膜腫のほかに、もう一か所で緑色の警戒信号を発した。さいわいそれはなんでもなかったが、余命について考えさせてくれ、新しく書物を読み進むことにあきらめがついた。他方で、少数なのに読んできた書物の内容はすみやかに記憶から去って、こちらもなんとかしろと警告を受け続けている。うまいぐあいに、読んだ書物の名を記録していたのが、四十歳を過ぎるころからしだいにメモの量が増えて、いくらかたまっている。それを読めば、少しは記憶を呼び戻すことができるだろう。

こうして、課植園の園丁の課業はわずかに変化して、回想の時間が加わった。今後、そのことで印象を新たにすることがあったら、この雑記帳に記しておこうと思う。その手始めがこの文章である。仕事を始めてみたら、断片的な書き抜きはなかなか意味をつかみにくい。文脈はなおさらである。たとえば、F・テンニエスの『ゲメインシャフトとゲゼルシャフト』はわりあい多くノートしてあったが、要約のように書いていて、とても難解だ

った。しかも、著者の記述は説得の姿勢が少なく一方的で、社会を二つに分類する基本の構想はうなずけても、抽象的なことがらの切り分けは強引すぎると感じた。十九世紀末にはこんなにもむずかしく論を展開する人がいたのだと、感心するばかり。だがそれを読んだ当時、帰省のうちに感じた付き合いのわずらわしさを、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの違いとして理解できたのは、この書物のおかげだった。職を辞していなかに帰ってきて、感じるストレスが弱くなったのは年の功だろうか。それともこれも衰えだろうか、考えてみる必要がある。読書ノートの初めの方にあった『エッセー』は、わたしに功德を与えてくれそうなので、書物を読み返すことにしよう。

懐かしく感じたのは『日本文化のかくれた形』（岩波書店で、このテーマで行なわれた連続講演を書物にしたものである。語り手は、日本の敗戦後に活躍した人たちのうち、加藤周一、木下順二、丸山真男の三人。本を引っぱり出してみると、講演会は一九八一年に開かれたそうだ。日本の経済がターニング・ポイントを過ぎて、社会があり方を変え始めた時代である。その時点で、戦後思想に大きな影響を与えた人たちが、それまでの思索をまとめるようにして、日本文化に支配的な「形」について語ったことになる。それを読んだころから三十年近く経った今、メモを読みなおすことは、時間的な距離を置くことから来る利点があるだろう。

昔のわたしは次のような感想を記していた。——三人三様に、向かうところ、アプローチの仕方、提示の仕方に特徴がある。加藤氏は、広い視野で理詰めにがっちり整理して見せる、日本の伝統に少ない人。木下氏は劇作家らしく、人間というものに、人間と世界のドラマに分析的でなく核心に切り込もうとする。丸山氏は、一つの学問領域の中で高みに到達しようとする。結局、人間の価値を日本文化の伝統のなかでうち建てること、新しい伝統として築くこと、それが問題だ。「価値」の価値を認め、内在化された価値を追求することが求められている——。この感想から今のわたしは大して進んではない。

思えば、この三人や戦後思想をリードした本物の知識人たちの著作をいくらか心がけて読んで、その知識を内面化しようと努めたから、それになずんだのだろう、この書物についてメモは断片的でもよく理解できる（とくに加藤周一の著作はかなり読んだので）。メモを読み返してみても、日本文化と日本人の特徴についてのその指摘は今でも有効だと思う。文化やその影響下で育つ人間は、四十年ぐらいで基底部にある形を変えないと考えるべきだろう。この国に暮らすわれわれは、暗黙裡に強制する文化的な習慣から少しでも自由になって行動するには、その形をよく認識する必要があると思う。しかし、時代が移って社会がいやおうなく変化したから、加藤説を批判的に発展させて現在でも力を発揮する

議論が必要になっているのだと思う。思想家としての丸山真男の議論も同じように考えることができよう。政治思潮は一九七〇年頃からすでに変化し始め、丸山も批判されるようになっていた。だが、理論家の議論は一般的な真理を含んでいるので、政治状況が変わっても有効性をもつものがあると思う。次のような普遍的な言明もメモしていた。――世界像Ⅱ自分を支えてくれる精神的支柱（人間は、自分の周囲に、世界に、たえず意味を与えながら生きていく動物）、個別的意味づけを相互に関連づけたもの。世界像の中で自我は自分の位置づけが出来、安定性をもつ――。忘れっぽい人間には、こういう有益な規定を抜き書きするのが意味あることだった。今度も復唱した。

このようにわたしは、一世代前の知識人たちから学んでいくらか吸収してきたのである。すると、漱石による集団意識の波動的な推移論を援用すれば、去って行きつつあるかつての波頭にすがっているにすぎない。先ほども言ったように、波長の長い文化や人間の習慣はゆっくり変化しても、社会状況は推移してとくに集団意識はすでに変化した。高度経済成長期までの戦後の思潮は過去のものになったとすべきだろう。わたしよりも一世代あとの人々の集団意識の新しい波頭がすでに来ているのを認識できないだけなのだ。漱石先生が言うように、先の波動をリードした大家でさえ次の波が来ているのに気づかないのだと

したら、しがない園丁には仕方のないことか。

しかし、時代遅れの老人だとしても、しばらくでも意味あることをしようと思うなら、回想だけしてはいけないだろう。たとえ波の位相が合わないとしても、ときどきは、現在の重要な著作も読まなければならないのだ。いずれにせよ、前後二つの波頭の谷間で才もなく華もなく記す雑記帳は波間に消える運命にある。だが、師と仰ぐモンテーニュが、(この師事もわたしが世の流行に疎いことを示しているのだが、「われわれの努めは、自分の品性を創ることで、書物を作ることではない」と説いている。園丁の手と頭のなぐさみは無形の成果をもたらすと信じ、日をつくって行こう。

二〇一五年みかんの花の咲く頃

後記

書き終わったあとで、講談社の冊子『本』五月号で、著書『加藤周一を記憶する』を出版した成田龍一という人の小文に出会った。敗戦から現在までの思想を、「戦後思想」の

時期、一九八〇年前後を中心とする時期、そして現在と三つの段階に分けている。第二の思潮は「戦後思想」が「制度の知」となり桎梏になったとして出てきたが、現在は、第二のもののある局面のみを極限化して、（反知性主義という）啓蒙主義の放棄のような動きになっている、と特徴づけている。筆者は、「人間やところが空虚なものとされている」今、「知の目録を点検し再生すること、解釈しなおしあらたな意味を付す営み」が重要だと考えて、二十一世紀まで「たえず自らの知を点検し、組み換え、状況に向き合っていた思想家としての加藤周一」をテーマに書物を著わしたという。加藤周一が「未来の他者」を意識していたとする人は、「啓蒙主義の放棄ではなく、啓蒙主義の蜂起へと至る」道を希望している。

その文章は、思潮の推移を語る点で、また加藤周一を取りあげているということでも、今回わたしの考えたことと共通するものを含んでいる。今後の集団意識が啓蒙主義の蜂起へと向かうかどうか定かではないが、わたしは、戦後思想の啓蒙主義を越えて、近世から近代への思想の結節点だったカントの啓蒙精神にまで戻るのがよいと思う。それは、根本的にものごとを考えようとするとき今でもベースキャンプだから、新しい波動となる思想は、現在の蒙を啓くカント的な普遍的価値を追求する動きとして生まれるだろうと思う。そのような波頭がやって来ることを待ち望む。